中国・東アジア 01

1　黄河文明～春秋戦国

①黄河文明と長江文明

神々の時代が過ぎ、伝説の五人の帝王（五帝）の時代のおわりに、天まで届く大洪水が起こった。河川の改修工事を行って洪水を治めた**禹**が次の王に選ばれ、その子孫が王位を受け継いだ。こうして生まれた**最古の王朝を、夏王朝という**。禹の即位は紀元前 2000 年頃、今から 4000 年前だ。「中国 4000 年」という言い方は、禹から数えているわけだ。

夏王朝は 600 年続いた。最後の桀王が暴君となり、人々を苦しめた。そこで、湯が桀王を倒して第二王朝を建てた。これを**殷王朝**という。

殷王朝は 400 年続いたが、最後の紂王が暴君となった。政治を忘れて快楽におぼれ（酒池肉林）、人々を苦しめ、忠告する側近を焼き殺した。そこで、武が紂王を倒して第三王朝を建てた。これを**周王朝**という。

これが、司馬遷の『史記』が伝える中国の建国神話だこの話のどこまでが神話でどこからが歴史的事実なのか、考古学的な調査をしなければならない。先史時代の簡単な復習をしてみよう。狩りをするための石器は打製石器だね。それでは、農業をするため、土を耕すための石器は？

○磨製石器ですね。斧とか、鍬とか…

そうだね。それから、穀物を蓄えたり料理をしたりするために**土器**が作られたんだよね。**磨製石器と土器が発見されれば、農業が始まっていた証拠だ**。中国最古の土器は、黄河中流域の**仰韶遺跡**で見つかった。赤土に黒い模様が描かれた**彩陶（彩文土器）**だ。竪穴式住居に住んでいた。日本の縄文時代とよく似ている。縄文文化は1万年以上前にさかのぼるが、仰韶文化は前 5000 年頃に始まった。

続いて、黄河下流域の**竜山遺跡**で発見された**黒陶**。全体が黒くて堅くて薄く、取っ手や足のついた高度な土器だ。この時代には、城壁に囲まれた都市が出現する。竜山文化は、前 3000 年頃に始まる。

▲ 彩陶（仰韶文化）

▲ 黒陶（竜山文化）

これら**黄河文明**は、麦や雑穀など畑作農業に支えられていた。まだ文字がないので、どのような国があり、どんな王がいたのか、わからない。

南の**長江流域**は、梅雨があるのでコメを作れる。**世界最古の水田跡**が発見されたのが、**河姆渡遺跡**だ。洪水を避けるため、床下が1メートル以上ある高床式住居に住んでいた。日本の弥生文化ととてもよく似ている。

日本では縄文文化→弥生文化の順番だが、中国では同じ前5000年頃、黄河流域に仰韶文化、長江流域に河姆渡文化が生まれた。別の民族、別の文化圏だったわけだ。黄河文明を作ったのは漢民族の祖先だが、**長江文明の担い手は東南アジア系の民族**だった。のちに越人とか百越と呼ばれる。

長江文明も文字がないのでどんな国があったかわからない。遺跡調査からはっきりしているのは、河姆渡文化を継承した**良渚文化**が、長江の洪水で滅んでいることだ。生き残った人々は、黄河流域へ避難したらしい。このあと、**夏王朝**が始まる(前 2000 年頃)。建国者の禹が治水で活躍したという神話は、失われた長江文明との関わりを暗示している。

夏王朝時代の遺跡は見つかっている(二里頭遺跡など)が、**文字がないので夏王朝とは特定できない。**文字が出てくるのは次の**殷王朝**からだ。

○甲骨文字ですね。

▲ 甲骨文字

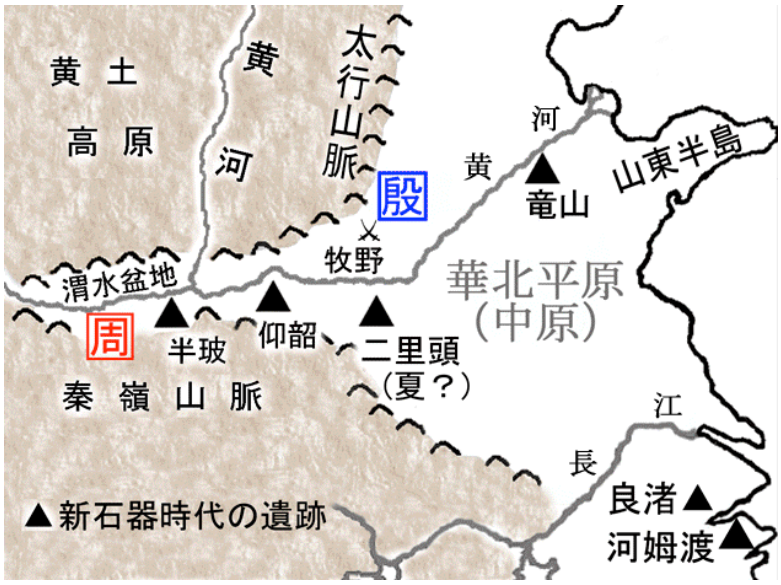
漢字の起源として有名だね。カメの甲羅やウシの肩甲骨に占いの結果が刻んである。このなかに、殷の王の名が出てきた。甲骨文字が大量に見つかった**河南省安陽市の小屯遺跡**が殷の都あと(**殷墟**)だとわかったんだ。

この遺跡からは、巨大な殷王の墓がいくつも発見された。儀式に用いた見事な**青銅器**とともに、大量の人骨が出土した。王の葬儀では**殉葬**が行われたようだ。死後も王に仕えるように、臣下が自害したり、あるいは奴隷を殺して王とともに葬ったりしたのだ。王は、神々をまつる神官であり(**神権政治**)、甲骨を焼き、ひびわれから神意を占った。不吉な結果が出ると、神々の怒りを鎮めるため、人間を生け贄としてささげた。儀式のたびに多数の奴隷を殺すので、そのための奴隷狩りも行っているんだ。

○こわっ…アステカ帝国みたいですね。

暴君紂王の伝説には、殷王朝のイメージが刻まれているね。この血みどろの儀式をやめたのが、次の周王朝だ。

司馬遷の『史記』によれば、周は西方からやって民族で、**渭水盆地**に定住した。渭水は黄河の支流で、3方を山に囲まれた天然の要塞だ。東に関所があるので**関中**ともいう。一方、殷が治めていたのは黄河の中下流域に広がる**華北平原(中原)**で、守りにくい。



牧野の戦いは、前1000年頃に起こった。周の武王が関中で兵をあげ、中原に攻め込んだ。殷は周の数倍の軍勢を集めたが、そのほとんどは殷に従ってきた諸部族の連合軍だった。彼らは戦いが始まると周に寝返ったため、殷は惨敗し、紂王は宮殿に火を放ち、火の中に身を投じて死んだ。これでわかることは、殷というのは諸部族の連合政権であり、中原全体を殷が直接治めていたのではない、ということだ。

②邑と宗族

周も、殷も、おそらく夏も、都市国家(**邑**)だった。年ごとに王がいて、殷のような強力な邑(大邑)を中心に中小の邑が都市国家連合をつくっていた。大邑が衰えると連合は解体し、別の大邑を中心に再編成される。このようなシステムを**邑制国家**という。殷の社会構造については、甲骨文字しか記録がないのでよくわからないが、次の周王朝からははっきりしてくる。

「邑」という文字は「口」+「人」からなっている。「口」は邑の形を表わす。東西南北に面した四角い城壁を持つ都市国家だ。南に正門があり、北に向かって大通りがある。一番北には神殿(廟)があり、この邑を建設した祖先を祭る(**祖先崇拝**)。住民はこの祖先の血をひく男系の血縁集団で、同じ姓を持つ。この集団を**宗族**という。宗族がはっきりしてくるのは周からだ。

他の邑には別の宗族が住んでいて、基本的に敵と見なされる。邑と邑のトラブルが戦争になるのを防ぐため、お互いに贈り物をする。最も効果のある贈り物は、若い女性だ。嫁として、人質として、交換する。女性は同じ宗族(同姓)の男とは結婚できず(**同姓不婚**)、必ず別の宗族へ嫁に行く。祖先崇拝や同姓不婚など、宗族のルールを**宗法**という。

子どもは父親の宗族に属する。中国人女性は結婚しても姓を変えない。彼女は夫の宗族には属さないからだ。彼女は結婚後も父親の宗族のために尽くす。中国史には、唐の則天武后、清の西太后のように日本人の想像を絶する「悪女」が現れるが、背景には「夫の宗族は敵」という考え方がある。宗族が理解できないと、次に説明する封建制度も理解できなくなる。

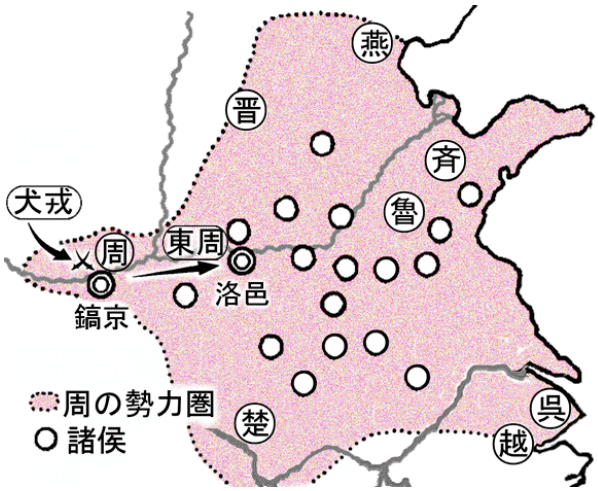
③周の封建制度

牧野の戦いのあと、周の武王はいった。

「殷は滅んだ。わしは関中に戻るが、中原を治めるため**諸侯**をおく。わが弟、周公旦よ。魯を**封土**として与える。わが功臣、呂尚よ。斉を封土として与える。毎年、貢ぎ物を届けよ。戦時には兵を率いて戦え」

功臣というのは周王に長く仕え功績のあった臣下のことだ。このしくみを**封建制度**という。それまで殷に仕えていた諸部族の王たちも、周王の諸侯となって忠誠を誓った。同姓の諸侯（周王の一族）とは初めから血縁関係だし、異姓の諸侯とは嫁の交換をして血縁関係を結ぶ。周の封建制とは、**血縁に基づく主従関係**のシステムだ。

封土を与えられた諸侯は、自分の臣下（**卿・大夫・士**）を封土内に派遣して新しい邑を建てさせ、軍役・貢納を課す。卿・大夫は封土を与えられた領主、士はこれに仕える者。王・諸侯・卿・大夫・士までが貴族階級で、封建制度が適用される。この下に庶民と奴婢がいた。まとめると、**主君が臣下に封土を与え、軍役・貢納を課す。**これが周の封建制度だ。



〇中世ヨーロッパにも封建制度ってありましたよね。

カール大帝が死んでフランク王国が解体し、ノルマン人の侵入が始まると、王や諸侯たちが主従関係を結び、封建制度が生まれた。たとえば、フランス王がノルマンディー公を臣下とし、封土を与えた。でも、両者の関係は血縁ではない。他人同士が**契約**を交わす。だからどちらかに契約違反があれば主従関係は解除できるし、義務さえちゃんと果たせれば、複数の主君と契約することも可能だ。

ノルマンディー公には軍役が課されたが、**貢納の義務はなかった**。不輸不入権といって、ヨーロッパの貴族は納税義務がなかったからね。**個人間の契約関係だったことと、貢納の義務がなかったことが、ヨーロッパ封建制の特徴だ。**

日本の鎌倉時代から江戸時代にかけても封建制度はあった。織田信長と豊臣秀吉は主従関係を結ぶが、秀吉は信長の一族ではないし、貢納の義務もない。日本の封建制は、中国型ではなくヨーロッパ型だ。

血縁関係が濃厚であること、血縁のない者とは契約が成立しにくいことが、今でも中国社会の特徴だ。血縁関係は、個人間の契約関係より一見、強固に見えるが、じつはものすごく不安定なんだ。

○どういうことですか？

血縁は、薄れていくからだ。王と諸侯が兄弟だったとする。彼らの死後、息子たちがそれぞれ王、諸侯を継ぐが、この2人の関係は、従兄弟となる。3代目になると再従兄弟――おじいさん同士が兄弟という関係だ。5代目、10 代目になれば、誰だかわからなくなっていく。血縁を強めようと嫁の交換をすることもできない。同姓不婚だからだ。

12 代幽王のとき、西方の遊牧民**犬戎**が侵攻した。諸侯たちは集まらず、都の**鎬京**は陥落、幽王は殺された。息子の平王が中原の洛邑へ逃れた。ここまでを西周、これ以後を**東周**という。周王朝は存続するが、王権は有名無実化した。

西周の滅亡

幽王は妃の申后を追放し、褒姒という美女を溺愛したが、褒姒は笑わない女だった。ある日、戦いの合図である烽火に手違いで火がつき、諸侯たちが軍を率いて集まった。間違いと聞いてむなしく去っていく諸侯たちをみて、褒姒が笑った。これ以来、幽王は褒姒の機嫌を取るためにたびたび烽火に火をつけた。諸侯たちはあきれ、誰も集まらなくなった。追放された申后の一族は幽王を恨み、敵の犬戎を引き入れた。幽王は烽火を燃やしたが、諸侯は誰も集まらず幽王は殺された。司馬遷が伝えるこの話から、封建制度が機能しなくなっていたことがわかる。

④春秋・戦国時代

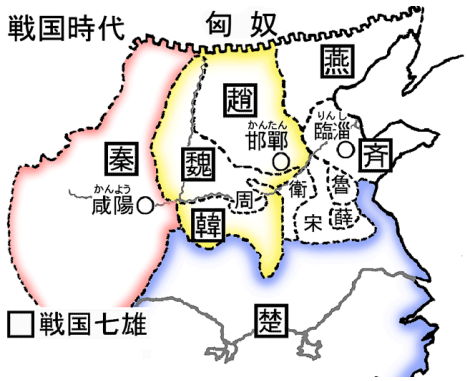
周の東遷から、**春秋時代（前 770−）**がはじまる。**『春秋』という魯の年代記**に記録された時代だ。

斉の桓公が諸侯に呼びかけた。斉は、東の山東半島にあった。

「周王さまをお守りし（**尊王**）、蛮族・犬戎を討つ（**攘夷**）ため、今こそ諸侯同盟を組もうではないか！」

斉の桓公、晋の文公、楚の荘王、呉王の闔閭、越王の勾践が、あいついで諸侯同盟のリーダー――**覇者**となった。**春秋の五覇**という。彼らは周王に忠誠を誓い、形の上では有力諸侯にすぎない。なお、周人系の斉・晋は周王に遠慮して「公」と称したが、楚・呉・越は長江文明を築いた越人系の国なので、「王」と称した。

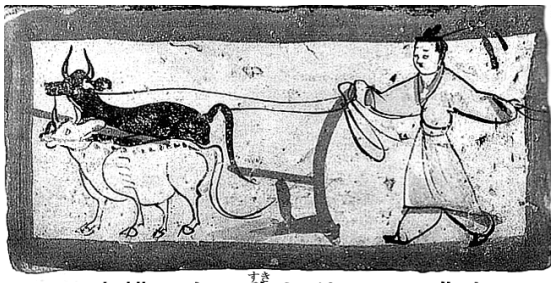
その後、晋が分裂して**趙・魏・韓**の三国（三晋）に分かれ、諸侯間の争いが激化した時代を**戦国時代（前 403−）**という。**『戦国策』**に記録された時代だ。有力諸侯は公然と「王」を名乗り、周王を無視して領土争いを繰り返した。



西では犬戎が去った渭水盆地には**秦**が建てられ、南では呉・越を併合した**楚**が長江流域を統一した。東では**斉**が魯を併合し、その北では**燕**が台頭した。趙・魏・韓の三晋に、秦・楚・斉・燕を加えた7大国を、**戦国の七雄**という。

○どうして諸侯同盟がばらばらになっちゃったんですか？

鉄器・牛耕の普及と関係があるんだ。鉄は武器にもなるが、農具として使われたことが社会に大きな影響を与えた。それまで農具は磨製石器だった。青銅器は金銀と同じ貴金属なので、農具には使わない。鉄器農具（斧や犁）が普及すると、森林伐採や開墾が容易になる。何十人もの労力を要した仕事が、数人の男たちでできる。宗族と呼ばれた大家族の統制が緩んで小家族経営が可能になり、祖先崇拝に代わって、個人主義や実力主義（**下剋上**）の風潮が生まれた。



▲ 牛耕…牛に犁を引かせる農夫。

春秋時代には、邑と邑の間には森林が広がっていたが、鉄器の普及により森林は耕地に変わっていった。**都市国家・邑は一定の領土をもつ領域国家に発展**し、国家間の領土争いが激化する。大国は小国を併合し、戦国七雄が出現した。

余った農産物（余剰農産物）の売買から大商人が出現した。各国は商業を保護し（**富国強兵**）、**青銅貨幣**を鋳造した。中国は、金・銀を産出しないので、貨幣も青銅で作った。斉・燕の**刀銭**はナイフ、三晋（趙・魏・韓）の**布銭**は犁、楚の**蟻鼻銭**は貝殻のミニチュアだ。

⑤諸子百家

鉄器の普及で伝統的な社会が崩れると、古い宗教は魅力がなくなり、人々は新しい思想を求める。ギリシアでは、オリンポス12神への信仰が衰え、ソクラテスやプラトンがギリシア哲学を説いた。インドではバラモン教が衰え、仏教やジャイナ教が生まれた。中国では、祖先崇拝が衰え、孔子や老子、墨子など**諸子百家**が新しい思想を説いた。「子」とは「先生」のこと。たくさんの先生、たくさんのグループという意味だ。重要な4つのグループを紹介しよう。

まずは**儒家**。**孔子**がはじめた。孔子は魯の下級貴族で、宮廷の図書館の仕事をしているうちに、周の時代に書かれた書物を目にした。

「むかし周という国があった。王と諸侯は血縁で結ばれ、家族のような国だった。いまは下剋上で、子が親を殺す時代になった。もう一度、家族愛(**仁**)を取り戻し、家族関係を政治の基本にしよう」

「君主は親、人民は子である。親が子を愛するように、君主は人民を愛せ。暴力ではなく**徳**で治め、人民に慕われる徳の高い君主になれ」

次は**道家**。**老子**や**荘子**がはじめた。**老荘思想**ともいう。

「鳥や動物は戦争をしない。贅沢も貧困もない。自然界の大きな法則、“道”にしたがって生きている。人間だけが文明を作り、自然の法則に逆らって生きるようになった。文明を捨て、自然に帰ろう(**無為自然**)。万民が土地を耕し、必要なものだけを作ればよい」

次は**墨家**。**墨子**が始めた。墨子も魯の人だが、経歴がわからない謎の人物だ。入れ墨のある受刑者だったという説もある。孔子を厳しく批判し、儒家の最大のライバルとなった。

「人は身分や血縁に関わらず平等である。無差別平等に人を愛せ(**兼愛**)」

「殺人が罪なら、戦争は大罪だ。侵略してはならぬが、侵略を受けた国には、防衛する権利がある。徹底的に国を守れ(**非攻**)」

墨家はプロの戦闘集団を持ち、侵略を受けた小国を助けている。秦の統一後、墨家は突然姿を消した。始皇帝には邪魔だったのだろう。

孔子は自分の思想を弟子に語った。弟子たちがこれをまとめたのが**『論語』**で、「子、いわく…」(先生はいった…)という引用の繰り返しになっている。のちに、孟子や荀子など優秀な弟子たちが孔子の思想を体系化するようになった。

孟子はいう。「徳で治めよ、と孔子はいった。戦国七雄はいずれも暴力で王になった。やがて、**天命を受けた有徳者が、暴君を倒して新たな王朝を建てる**だろう。天命があらたまり、王の姓がかわる(**易姓革命**)」

「人民の声は、天の声である。殷の紂王、暴君であった。周の武王に倒された。人民は周を支持した。人民は常に善である(**性善説**)」

荀子はいう。「人民は欲望のままに生きる(**性悪説**)。人民の要求に君主がすべて従ってしまえば国家が成り立たない。税も納めず、働く者もいなくなる。人民に最低限の**礼**(秩序)を教えるのが君主の仕事だ」

荀子の弟子に、**韓非**がいた。韓非は、人民を統制するには、礼を教えるのでは不十分だと考えた。

「法を定め、刑罰を定め、官僚機構を整えて人民を監視すべきだ」

徳ではなく法で治める。これが**法家**の思想だ。秦がこれを採用し、天下統一に着手する。

2 秦漢帝国

①秦の統一

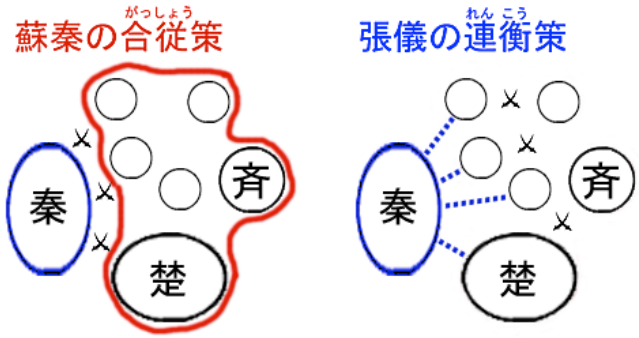
戦国七雄で一番西にあるのが**秦**。もともと遊牧民だったが、犬戎の侵攻の時に周の平王を守ったので、諸侯として認められた。戦国時代、**孝公**が**法家の商鞅**を登用してから強大化し、他の六国を脅かした。

縦横家は外交を論ずる諸子百家だ。**蘇秦**は、各国に呼びかけた。

「晋に対抗するため、六国がタテに同盟する**合従策**を！」

秦の恵文王(孝公の子)に仕える**張儀**も各国に呼びかけた。

「秦にまったく野心はなく、平和を望む。秦と六国とがそれぞれ個別にヨコの同盟を結ぶ**連衡策**を！」



秦と並ぶ大国だった楚では、国論が割れた。楚王はいった。

「秦は信用できる。連衡策を採用し、秦楚同盟を結ぶべし」

王族の**屈原**は連衡策の危険性を訴えたが王は聞かず、都を追われて自害した。**『楚辞』**という詩集に屈原の詩が残されている。

楚王は秦との同盟を結ぶため国境へ行き、そのまま秦に拉致された。秦が楚を侵略しても他の国々は楚を助けなかった。それぞれが秦と連衡していたからだ。

秦王政は、人質として趙で少年時代を過ごした。殺されかけたこともある。13 歳で即位してからも、側近の裏切りやテロリストの襲撃を経験した。疑い深く冷酷な人間に成長した政が信じたのは法家の思想だった。成人すると専制を強化し、**法家の李斯を丞相とした**。丞相とは総理大臣のことだが、軍事は**太尉**、監察(検察・警察)は**御史大夫**が担当し、官僚同士が監視し合うようにした。

10 年かけて趙・韓・燕・魏・楚を滅ぼし、最後に**斉を滅ぼして天下を統一(前 221)**。「はじめて王の上に立つ者」、**始皇帝**と称した。

▲ 秦の半両銭
「半両」と篆書で刻まれている。

始皇帝は封建制を全廃して**全国を 36 郡に分け、郡県制を実施**した。**文字を篆書に、貨幣を半両銭に統一**し、長さ・体積・重さの単位(**度量衡**)や、馬車の車輪の幅(車軌)を統一して、徴税や交通を容易にした。将軍・蒙恬に命じて北方の遊牧民**匈奴**に対する遠征をおこない、秦・趙・燕の長城を連結して**万里の長城を完成**した。

これらの統一事業は目的としては正しかったが、あまりに急ぎすぎ、人民の意向を無視して行われた。長城の工事と並行して、首都・**咸陽**の始皇帝の宮殿(阿房宮)や始皇帝の墓(驪山陵)の建設も進められ、強制労働に動員される人民は始皇帝を恨んだ。儒家はいった。

「始皇帝は徳がない。天は有徳者を選び、革命が起こるであろう」

李斯は、始皇帝に進言した。

「人民に学問は不要です。革命を起こすのは、儒家であります」

農業・医学・占卜を除く諸子百家の書物が焼かれた。460 名の儒家が逮捕され、生き埋めにされた。(**焚書・坑儒**)。

法家の学者たち

商鞅は秦の孝公に仕え、変法と呼ばれる大改革を行った。封建制を廃止して県をおき、身分に関わらず法で裁いた。特権を奪われた貴族は商鞅を恨み、孝公なきあと反逆罪で告発した。国外逃亡を図った商鞅だが、国境の検問所で逮捕され、処刑された。通行証なきものは出国できないという、商鞅自身が定めた法による。**韓非**は韓の王子で、李斯とともに荀子に学び、法家に転じた。どもりがひどかったので学者の道を選び、法家の思想を集大成した(**『韓非子』**)。**李斯**は秦王政に仕えて天下統一を助けたが、韓非の才能をねたみ、秦王政に仕えようとした韓非を投獄して自害させている。

〇人民は悪だっ！　法家の思想ですね。

始皇帝には多くの息子がいたが、長男・扶蘇は父に批判的だった。扶蘇が二世皇帝になれば、政治はよくなると人民は期待した。しかし始皇帝は扶蘇を長城へ追放し、末っ子の胡亥を愛した。

始皇帝は、全国視察の途中で突然死んだ。胡亥は李斯と共謀して父の遺書を偽造し、兄の扶蘇を自害させて二世皇帝となった。そして、始皇帝の墓の工事を急ぎ、楚の人民の動員を命じた。

その年は雨が多く、洪水のため楚人の都行きは遅れた。処罰を恐れた楚人の陳勝は仲間の呉広にいった。

「大死にはいやだ。二世皇帝を倒そう。王も、諸侯も、大臣も、将軍も、家柄なんか関係ないのだ！(**王侯相将いずくんぞ種あらんや！**)」

陳勝は、楚人を集めていった。

「おれの本当の名は扶蘇だ。裏切り者の二世皇帝・胡亥を倒す！」

こうして、**楚の農民反乱(陳勝・呉広の乱)**がはじまった。反乱はすぐに鎮圧されたが、これを機に各地で反乱がはじまった。

楚では、名門貴族の**項羽**が挙兵した。農民出身の劉邦は、項羽と呼応して都・咸陽を攻略し、秦を滅ぼした。あとから都入りした項羽は劉邦を「漢王」の称号を与えて諸侯とし、地方に追放した。プライドが高く傲慢な項羽は部下の信頼を失い、部下の面倒見の良い劉邦の方に。つまり劉邦には徳があったわけだ。人材が集まった。劉邦は項羽を裏切り、両者は戦争になった(楚漢戦争)が、**垓下の戦い**で劉邦が勝利し、**漢王朝(前 202-後 220)**を開いた。この年、地球の裏側ではザマの戦いがあった。

〇カルタゴのハンニバルがローマ軍に敗れた、あれですね！

そうそう。スキピオ率いるローマ軍が、ハンニバル率いるカルタゴ軍を撃破し、西地中海を統一した戦いだね。ローマの台頭と漢の統一が同時期だということを、頭に入れておこう。

②前漢

秦帝国がわずか15年で崩壊したことを教訓とし、漢はゆるやかな統治をおこなった。秦の過酷な法を撤廃し、地方の慣習法にまかせた。郡県制を縮小し、旧六国では封建制を復活した。劉邦の一族功臣を呉王、楚王、燕王…として諸侯とし、封土(国)を与えたわけだ。このように**郡県制と封建制を併用したことを郡国制**という。

劉邦なきあと皇帝と諸侯との血縁関係は緩み、諸侯は再び独立への動きを強めた。景帝が諸侯国の領土を削減しようとすると、呉王・楚王ら諸侯が反乱を起こした(**呉楚七国の乱**)。漢はこれを鎮圧し、次の武帝の時までには事実上の郡県制に移行した。

〇つまり、始皇帝のやり方に戻っちゃったわけですね。

だから武帝は考えた。これはやばいぞ、と。

「秦の失敗は、法家の失敗だ。漢はその逆をやればよい。法家が一番嫌ったのは儒家だ。焚書坑儒までやった。よし、儒家を採用しよう！」

儒家の学者・**董仲舒**(とうちゅうじょ)は、武帝の相談役となり、建議した。

「われら儒家が理想とするのは古代の周の政治であります。周の記録の多くは始皇帝に焼かれましたが、5つは残っております。この五経を官吏(かんり)に学ばせましょう。五経を研究する**五経博士**(ごきょうはかせ)をおきましょう」

「官」は高級官僚、「吏(り)」は下級官僚、「官吏(かんり)」とは官僚のことだ。官吏に儒学を学ばせることにしたので、**儒学の官学化**という。国教化とはいわない。民衆は道教を信仰していた。儒学なんか知らない。

五経とは？

「経典」といっても宗教的な文献ではなく、哲学・政治学・歴史の古典である。いずれも周代に成立し、儒家によって伝承された。

易経(えききょう)…占卜(せんぼく)(占い)の方法と宇宙論。
詩経(しきょう)…中国最古の詩集。　**書経**(しょきょう)…周王の言行録、歴史書。
春秋(しゅんじゅう)…魯(ろ)の歴史書。　**礼記**(らいき)…周の制度と儀式。

これらの多くは始皇帝に焼かれ、漢代に再び書物にまとめられた。五経博士は五経のいずれかを専門とし、官吏候補生に教授した。

後漢になると、周代に書かれた古文の再発見が続き、これを解読する**訓詁学**(くんこ)が発達した。**馬融**(ばゆう)や**鄭玄**(じょうげん)が代表的な訓詁学者だ。

官吏登用法（官僚採用システム）の**郷挙里選**も武帝が採用した。**地方長官が**、担当地域（郷里）の**有徳者を官吏として皇帝に推薦する**。法ではなく徳で治めよ、という儒学の思想を実践したわけだ。

〇徳があるかどうかなんて、どうやって判断するんですか？

「徳」っていうのは親孝行だとか、人望があるとか、生活が質素だとか、主観的な基準だよね。だから実際には、読み書きができて、儒学の教養のある者が「有徳者」ということになった。当時の民衆は文盲だから、地方の有力者（豪族）の子弟ばかりが採用されることになった。でもこの郷挙里選を通じて地方の意見が中央の政治に反映された。地方の反乱が起こらず、漢は 400 年の長期王朝となった。儒学の官学化は成功だったわけだ。

〇武帝といえば、匈奴遠征ですよね。

漢王朝最大の敵は、**匈奴**だ。戦国時代末に匈奴に強力な指導者、**冒頓単于**が現れた。「単于」とは、遊牧民の王の称号だ。冒頓は兵士を集めていった。

「おれが矢を射る。同じ場所に矢を射よ。従わない者は斬る」

冒頓は愛馬を野に放ち、矢を射た。兵士たちも矢を射て、馬は死んだ。次に妃を野に放ち、矢を射た。ためらった兵士を斬った。最後に冒頓は父を狩りに誘い、父に向かって矢を射た。兵士たちも従った。こうして父を殺して冒頓が単于となった。

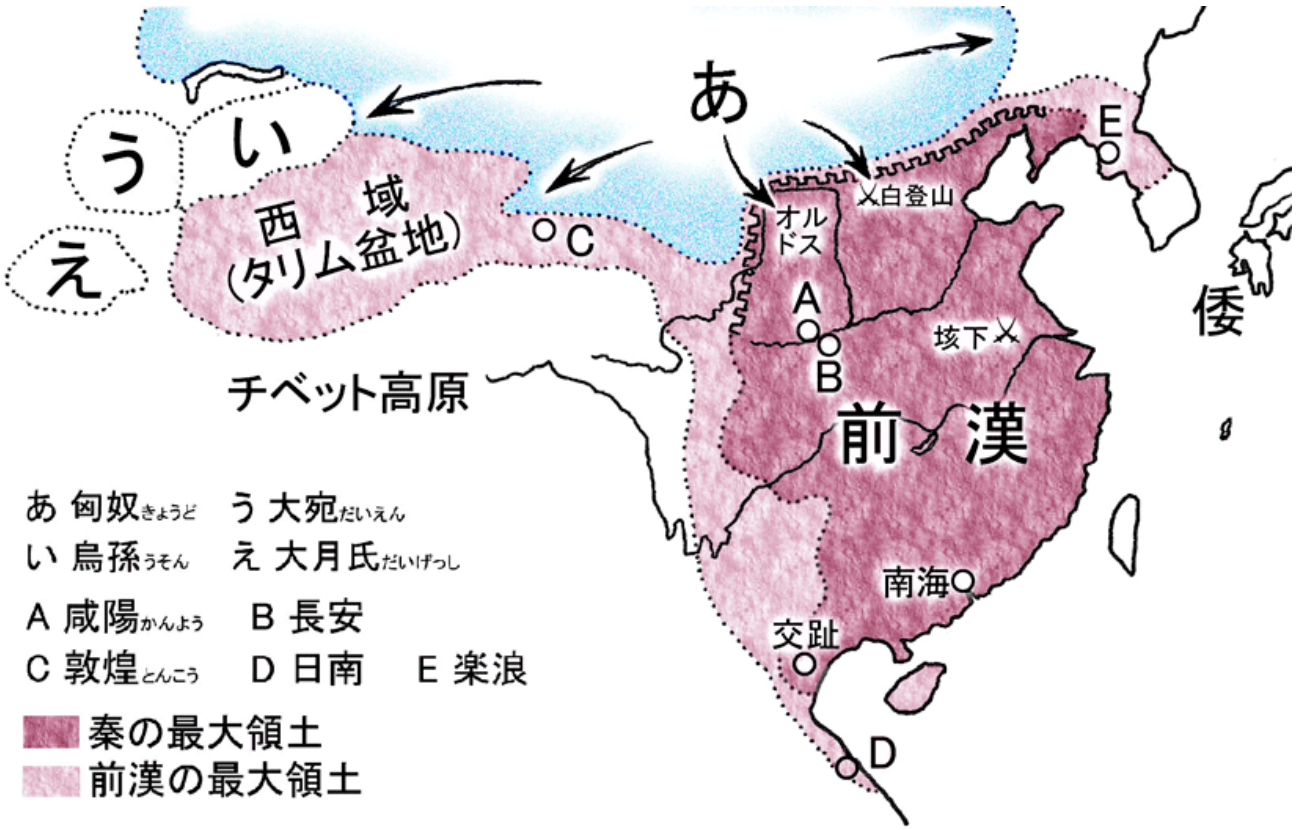
冒頓は、敵対部族の月氏を攻撃し、月氏の王の首をはねて頭蓋骨で杯を作らせ、酒を飲んだ。月氏は恐れて西方へ移動した。移動後の月氏を**大月氏**という。冒頓は、漢の劉邦にも勝利し、毎年、貢ぎ物を贈ることを約束させた。これ以後、匈奴は漢を属国扱いしていた。

武帝は、使者の**張騫**にいった。

「大月氏の王に伝えよ。漢と同盟し、匈奴を討つべし、と」

張騫は途中で匈奴に捕われ、匈奴の単于に仕えて妻ももらった。十数年間、匈奴とともに暮らして情報を集めたあと、脱走して大月氏へ向かった。大月氏は**バクトリア（アフガニスタン）**に移動して繁栄しており、漢との同盟は断った。なお、大月氏の一諸侯だったのが、のちに北インドを征服したクシャーナ朝だ。

張騫は出発から 20 年後に漢に帰国し、武帝に西域諸国の情報をもたらした。武帝は**衛青と霍去病**に命じて匈奴を攻撃し、**タリム盆地のイラン系オアシス都市国家群**を匈奴から解放した。これにより、**オアシスの道（絹の道／シルクロード）**が漢の支配下にはいった。東西交通が盛んになり、漢は絹織物を輸出し、西域から馬を輸入した。イラン系国家の**大宛**は**汗血馬**という名馬の産地だったが、汗血馬の輸出を禁じたため、武帝は**李広利**に命じて大宛に遠征し、3千頭の汗血馬を献上させた。



南中国、いまの広東省からヴェトナム北部にかけては越人が住み、海上交易が盛んだった。始皇帝はここを征服して南海郡など3郡をおいたが、秦の滅亡に乗じて秦の武将・趙陀が**南越**国王と称して独立した。南越は約 100 年続いたが、漢の武帝は南越の内紛に乗じてこれを併合し、**交趾郡・日南郡など南越九郡**をおいた。これによって漢は、インド方面とつながる**海の道**へのアクセスが可能になった。

東方では、朝鮮半島北部に**衛氏朝鮮**があった。漢の諸侯国の一つ、燕が独立を図り、漢に征服されたとき、燕王に仕えていた武将の**衛満**が、この地へ逃れて朝鮮王と称した。衛氏朝鮮は日本列島(倭国)との交易ルートを支配して約 100 年続いた。漢の武帝はこれを征服し、**楽浪郡など朝鮮四郡**をおいた。

武帝の統治は半世紀に及び、対外戦争で華々しい勝利を続けた。漢の領土は最大となったが、莫大な軍事費により財政は底をついた。財務大臣が武帝に建議した。

▲ 秦の半両銭

▲ 漢の五銖銭

「半両銭が足りません。新たに**五銖銭**を鋳造しましょう。また、**塩・酒・鉄を専売**としましょう」

「各郡に命じて物資を貢納させ、不足地で高く転売する**均輸法**、保管して不足時に高く売る**平準法**を実施しましょう」

〇専売って何ですか？

国営化のことだ。塩・酒・鉄の3品目は、民間で自由に売買することを禁じ、国の独占事業とする。これらに高い税をかければ、財政再建できるというわけ。均輸法・平準法も、商人がやっていることを政府がやるわけだから、民間の商業を圧迫する。

この結果、重税と景気の悪化で中小農民は没落し、大商人は土地を買い占めて大土地所有者（**豪族**）に転身した。ローマにおけるラティフンディアの形成に似ているね。

ローマの貴族は、元老院議員として政治権力を握っていた。**漢の豪族は郷挙里選を通じて官吏に採用され**、政治権力を握って大土地所有を守ろうとした。また、豪族が皇后の一族（**外戚**）となって、高位高官を独占するようにもなる。

後宮と外戚

結婚のルールは同姓不婚と一夫多妻だ。漢の皇族・劉氏は、異姓の娘と結婚しなければならない。皇帝のお妃候補となるのが、豪族の娘たちだ。全国から募集に集まったお妃候補数百人は、後宮で生活する。ここに入れる成人男子は皇帝だけだ。皇帝の男子を産めば、彼女は皇后（第一夫人）となり、その一族は外戚として高位高官を独占できる。皇帝の座を狙う者もでてくる。王莽も、則天武后も、楊貴妃も、みな外戚だ。

武帝の孫、元帝の後宮に、豪族王氏の娘が入って王皇后となった。彼女の甥が野心家の**王莽**で、儒学、とくに孟子を研究した。

「易姓革命、か…天命が下れば誰でも皇帝になれる…」

このあと漢の皇帝はみな早死にをし、王莽が実権を握る。危機感を抱いた哀帝は王莽を解任し、限田法（大土地所有禁止法）などの改革を行ったが、哀帝も 25 歳で急死。王莽は9歳の平帝を建てて実権を握り、13 歳で平帝が急死（毒殺の噂あり）、**王莽が皇帝になった（後８）**。

「天命あらたまる。国号を**新**とする。政治・経済・外交は、周に戻す」

○「天命があらたまる」って、どうしてわかるんですか？

天から石が降ってきて、「王莽皇帝になれ」と書いてあったそうだ。もちろん部下にそういう報告をさせるわけだ。

王莽は、官僚機構も、貨幣制度も、数百年前の周に戻そうとしたため大混乱が起こった。匈奴や高句麗の王を諸侯に格下げしてかえって彼らの侵攻を招いた。豪族たちは王莽打倒を叫んで挙兵し、漢の復活を望む農民軍も立ち上がった（赤眉の乱）。王莽は殺され、新は 15 年で崩壊した。

③後漢

光武帝（劉秀）は、武帝の弟の子孫にあたる。王莽政権崩壊後の混乱を制して即位し（後 25）、漢を復活した（**後漢**）。戦乱で荒廃した長安から**洛陽**へ遷都し、後漢 200 年の安定の基礎を築いた。高句麗や匈奴（南匈奴）も後漢に服属し、**倭人がはじめて朝貢した**。北九州にあった小国、奴国の王が光武帝に使者を送り、奴隷などを献上した。光武帝は使者に**金印**を授けたが、「**漢倭奴国王**」と刻まれた金印が、博多で発見されている。

〇朝貢って何ですか？

中華帝国の皇帝に対し、周辺諸国の王が貢ぎ物を贈ることだ。見返りに王号や官位をもらったり、軍事援助を受けたりする。くわしくは、唐のところで説明しよう。

西アジアではイラン系の**パルティア王国（安息）**の全盛期で、**ローマ帝国（大秦）**と抗争を続けていた。インドでは、イラン系のクシャーナ朝（大月氏）が、南インドのサータヴァーハナ朝と対立していた。

タリム盆地を防衛する軍司令官である**西域都護の班超**は、部下の**甘英**に命じた。「大秦へ行け。様子を探ってこい」

帰国後、甘英は報告した。

「条支（シリア）の大海に妨げられ、大秦王とは面会できませんでした」

シリアの向こうの大海は地中海。当時は五賢帝時代、パックス=ロマーナ期なので、ローマとシリア間には定期航路があった。甘英、どうやらパルティア人にだまされたらしい。ローマとパルティアは戦争状態にあったので、漢がローマと同盟することをパルティアは恐れていた。

このあと、ローマの使者が後漢を訪問する。ヴェトナムの日南郡に国籍不明の船が入港し、「**大秦王安敦の使者**」だと名乗った。五賢帝最後の**マルクス=アウレリウス=アントニヌス帝**だが、彼らが持ってきた貢ぎ物が象牙（象の牙）　やウミガメの甲羅だった。東南アジアやインドの産物だ。この使者は偽物であろう、と『後漢書』に書いてある。ローマ側の文献にも、漢に使者を送ったという記録はない。

東南アジアの**扶南**、南インドの**サータヴァーハナ朝**がローマとの交易で栄えていた。これらを結ぶ「**海の道**」によってローマと漢は間接的に結ばれていた。しかし、直接の国交はついに結ばれなかった。ローマはこのあと軍人皇帝時代の混乱期を迎え、後漢は黄巾の乱で崩壊する。

3 魏晋南北朝

①後漢の滅亡と三国時代

後漢の末期も、幼い皇帝を外戚が操るようになった。外戚に対抗するため、成人した皇帝が頼りにしたのが**宦官**だ。皇帝の養育係であり、相談役として宦官は権力を握り、外戚を排除した。

宦官とは何か？

遊牧民は、馬や羊の群れを統制するために大半のオスに対して去勢を行う。外科手術で生殖器を切除する。発情期がなくなり、コントロールしやすくなる。この技法を人間に応用したのが、宦官だ。中国では、後宮で大量の宦官が必要だった。後宮に入れる成人男子は皇帝一人。召使はすべて宦官を採用する。皇后は、皇子を生むと育児を宦官に任せる。皇子は宦官を親と思い、信頼するようになる。こうして、宦官は権力を握った。

武帝を批判し、刑罰（宮刑）として宦官にされた司馬遷のような例もあるが、宦官の大半は志願者（自宮）だった。貧困から脱するため、男を捨てて後宮に入る。彼らはその見返りとして、カネと権力を求めた。一族を地方長官に任命し、官僚から賄賂を要求した。だから、宦官政治は必ず腐敗する。

官僚たちは、宦官派と反宦官派に分かれて派閥抗争（党争）を続け、宦官は**反宦官派の官僚を公職追放した**。これを**党錮の禁**という。「錮」というのは、政府から追放することだ。官僚は豪族出身者が多かったから、豪族が宦官打倒を掲げてつぎつぎに兵をあげた。さらに、宦官政府の重税に反発した農民たちも蜂起した。宗教結社**太平道**の指導者・**張角が率いる黄巾の乱(184-)**によって、後漢は事実上崩壊した。秦の始皇帝以来 400 年間続いた古代中華帝国（秦漢帝国）が滅亡し、以後 400 年間の動乱時代（**魏晋南北朝時代**）が始まった。中国史で一番ややこしい時代だが、ローマ帝国の崩壊と比べてみるとわかりやすい。

各地に群雄割拠したのは、豪族出身の軍人たちだ。華北（中原）を統一して洛陽に入城した**曹操**は、後漢最後の献帝から丞相に任命されて実権を握り、魏王と称した。息子の**曹丕**は献帝に譲位させてみずから皇帝となり、**魏**を建国した(220)。

曹氏（魏）の漢王朝乗っ取りに対抗し、江南（長江下流域）の豪族**孫権**は、漢の皇族・**劉備**と同盟し、長江に艦隊を集めて曹操軍の南下を阻止した（**赤壁の戦い**）。曹丕が魏の皇帝と称すと、**孫権は呉の皇帝**、内陸の四川に立てこもった**劉備は蜀の皇帝**と称した。これが**三国時代(220-280)**。同時代のローマ帝国で、属州の軍司令官たちが皇帝と自称して争った軍人皇帝時代に似ているね。

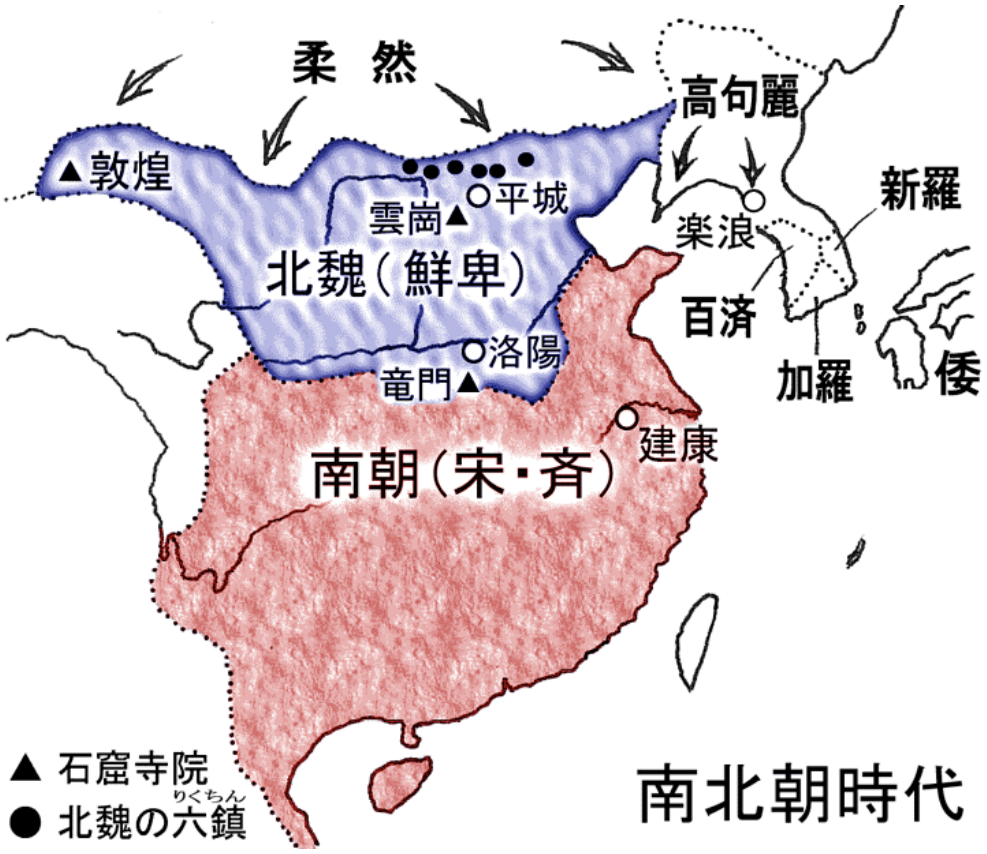
最も短命だったのが蜀で、劉備なきあと側近の**諸葛亮**が魏との戦争中に病死。魏に併合された。魏では、野心家の軍人**司馬炎**がクーデタをおこして曹氏から帝位を奪い、**晋**を建国。**晋が呉を併合して三国を統一**した。このあたりややこしいが、順番を説明できるようにしておこう。

禅譲と放伐

孟子の易姓革命説では、暴君がみずから有徳者に譲位することを禅譲、譲位を拒否して武力で倒されることを放伐という。王莽も、曹丕も、実際にはクーデタ(放伐)で実権を握ったあとで、皇帝に強制して禅譲の儀式を演出した。南北朝時代には強制的な禅譲が繰り返されるが、譲位した前王朝の一族は皆殺しになっている。

②五胡の侵入と南北朝時代

中華帝国の混乱に乗じて、遊牧民の侵入も始まった。北のモンゴル高原からは**匈奴・羯・鮮卑**、西のチベット高原からは**氐・羌**、あわせて五胡という。「5つの蛮族」という意味だ。彼らはその戦闘能力を飼われて漢人武将たちに傭兵として採用されたが、司馬氏(晋)の皇位継承争い(**八王の乱**)に乗じて独立した。匈奴は洛陽を攻略して晋を滅ぼし、洛陽市民を虐殺(**永嘉の乱** 311)。これ以後、五胡が入り乱れて華北で興亡を繰り返す**五胡十六時代**がはじまった。ローマ帝国の末期に傭兵として採用されたゲルマン人が民族大移動を引き起こし、西ゴートやヴァンダルがローマ市を略奪したのと似ている。



司馬氏の皇族で生き残った司馬睿は、江南の**建康**（南京）に逃れて政権を維持した。これ以後を**東晋**という。西ローマ帝国の滅亡後も、コンスタンティノープルを都とする東ローマ帝国（ビザンツ帝国）が存続したのと同じだ。亡命政権なので皇帝権力は弱く、漢代以来の豪族の大土地所有が続いた。五胡に対抗するため軍部の発言力が高まり、クーデタが多発したため、**宋・斉・梁・陳**と短命な王朝が続いた。この4王朝をあわせて**南朝**という。

さて、民族大移動の後、西ヨーロッパを統一したのがフランク王国だ。フランクが成功したのは、ローマ人の宗教を取り入れたからだよね。

○カトリックに改宗したんですね。他のゲルマン人はアリウス派。

フランク王国にあたるのが、**鮮卑（拓跋氏）の北魏だ。**3代**太武帝が五胡を統一**した。少数民族の鮮卑は人口の大多数を占める漢人の協力を得ることが必要だった。太武帝は、漢人の宗教である**道教を国教化**し、6代孝文帝は鮮卑語や鮮卑の服装（**胡語・胡服**）を禁止し（**漢化政策**）、長城の南の**平城**を捨てて、後漢以来の漢人の都である**洛陽へ遷都**した。ラテン語やカトリックを取り入れたフランク王カールが西欧を統一し、西ローマ皇帝として戴冠したのと似ているね。均田制を始めたのも北魏だ。

土地制度について説明しよう。漢代に広まった**豪族による大土地所有**は貧富の格差の象徴だったので、これを何とかしようという試みが何度も行われた。前漢末の哀帝が発布した**限田法**がその最初だが、官僚がみな豪族出身者だったので、だれも守らなかった。貧農は飢え、流民となった。流民とは、略奪を繰り返しながら放浪する集団のことだ。ある町が襲われると、すべてのものが食いつくされる。その町の住民も流民に合流し、別の町を襲う。こういう暴徒の群れが黄巾の乱を引き起こしたわけだ。あとに残るのは荒れ地だけだ。これを放置すれば、国家が崩壊する。魏王・**曹操は屯田法を実施**した。荒れ地を国有化し、流民に分配する。まず生活を保障し、それから税をとり、兵士を育成する。治安回復と徴税・徴兵確保という一石三鳥を狙った。

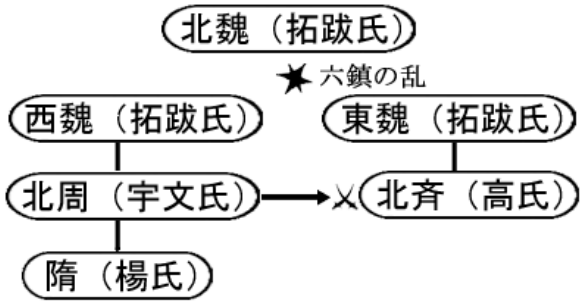
魏を乗っ取った**晋の司馬炎も、占田法・課田法を実施**した。占田法は土地買い占めの制限法で限田法と同じ、課田法は土地割り当て法で屯田法と同じだ。**北魏・孝文帝は均田制を実施**した。字の通り、均等に土地を分配する法だ。魏・晋・北魏、いずれも黄巾の乱や五胡の侵入で荒廃した華北を治めた王朝だということに注目しよう。なお「田」というのは耕地一般のことで水田ではない。寒冷な華北に水田はない。

屯田・課田・均田はいずれも国有地だから、農民は政府に直接税を納める。政府は財政がうるおい、軍備も増強できる。**皇帝権力は強化される。**一方、南朝にはもともと荒れ地がほとんどなく、国有化ができなかった。だから皇帝権力はいつまでも弱体で、クーデタが繰り返され、最後は北朝の隋に滅ぼされてしまった。

モンゴル高原では、新たな遊牧民**柔然**が南下の機会をうかがっていた。これに対抗するため、北魏は6カ所の長城防衛隊（六鎮）を置いた。彼らは胡服を着て馬に乗って戦う。ところが6代孝文帝が漢化政策を強行して洛陽に遷都し、胡語・胡服を禁じた。漢化した宮廷の人々は、六鎮の兵士を蛮族扱いした。孝文帝の死後、ついに六鎮は反乱を起こし、有力軍人が北魏の実権を握った。六鎮出身の宇文氏と高氏が勢力を争い、それぞれが皇帝を立てた（**西魏・東魏**）。さらに宇文氏・

高氏がみずから皇帝となり(**北周(ほくしゅう)・北斉(ほくせい)**)、渭水盆地を拠点にした**宇文氏(北周)が**、中原を拠点にした**高氏(北斉)を滅ぼして華北を再統一**した。この北周の外戚が、隋を建てた楊堅だ。

まとめるとこうなる。



北方民族の王の称号

匈奴・鮮卑の王は「単于(ぜんう)」と名乗っていたが、**柔然の王ははじめて「可汗(カガン)」と名乗った。**可汗の称号は、突厥・ウイグル・契丹でも採用され、モンゴルの「ハン(ハーン)」に受け継がれた。

突厥に敗れた柔然は西走した。その後、アヴァール人がヨーロッパに侵攻し、フランクのカール大帝に撃退された。アヴァールの王号は「カガン」である、とビザンツの記録にあるので、アヴァール＝柔然説が有力である。

③仏教と道教

インドで生まれた仏教は、チベット高原にさえぎられて西域経由で中国へ伝わった。伝説では、後漢の2代皇帝・明帝が夢に仏陀の姿を見て僧を洛陽に招いた、とされる。後漢の宮廷では仏像が祭られていたが、民衆への布教はまだなかった。

▲ 仏陀と弟子たち
（タリム盆地・ミーラン遺跡出土）

黄巾の乱にはじまる大混乱の中で、人々は宗教に救いを求めた。五胡十六国時代、西域タリム盆地のオアシス都市・**亀茲（クチャ）**から、2人の僧侶がやってきた。**仏図澄**と**鳩摩羅什**だ。2人ともイラン系の人物で、インドで修業している。

仏図澄は予知能力があったらしい。神異僧（超能力者）として知られた。凶暴な羯族の王も起立して彼を迎えた。洛陽中心に数百の寺を建て、はじめて民衆に布教し、1万人を改宗させたといわれる。

鳩摩羅什は父親がインド人で、もともとバイリンガルだった。漢文もマスターし、氐・羌の王に迎えられ、インドから持ち帰った**サンスクリット語の仏典を漢訳した**。漢訳仏典には、鳩摩羅什による旧訳と、唐の玄奘による新訳がある。

中国僧ではじめてインドへ留学したのが、東晋の**法顕**だ。60 歳を過ぎて出発し、五胡が争う華北を通過し、西域経由でグプタ朝インドに到達。**チャンドラグプタ2世（超日王）**と会見した。経典を得て海路出発、スリランカ、ジャワ経由でしたときには 70 歳を過ぎていた。同行した 10 人の弟子は死に絶え、一人で戻ったスーパー爺さんだ。この旅の記録が**『仏国記』**だ。法顕の帰国後、グプタ朝はナーランダー僧院を創設した。**法顕はナーランダー僧院では学んでいない**。

次は**道教**。医学が未発達だった古代社会では、平均寿命は極端に短く、老人は少なかった。法顕みたいな人は例外だ。健康で長生きする方法（**不老長生の術**）を人々は求めた。古代中国人は、生命のエネルギーを「気」と表現した。気が満ちれば元気、気が枯れれば病気になる。

気は自然界に満ちているので、山で生活して気を取り入れればよい。気を取り込む呼吸法（気功）、人体の気の通り道を刺激して病気を治す鍼・灸、動植物や鉱物から薬品を調合する漢方薬、これら東洋医学の源は、ここにある。山中でこのような修業・研究をする人々が神仙（仙人）と呼ばれ、神仙を崇拝する**神仙思想**が生まれた。神仙思想を広めた人々を道士とか方士という。諸子百家の老子や荘子は、神仙思想を哲学化し、「無為自然」の**老荘思想**を生みだした。始皇帝も不老長生の薬を求め、徐福という道士に命じて東方海上にあるという神仙の島に派遣している（徐福は戻らず、始皇帝は死んだ）。

後漢末期の華北で、**張角という道士が太平道を組織した**。病気治しと貧民救済で信者を増やし、数十万の教団に膨れ上がると世直し（革命）を唱えて**黄巾の乱**を起こしたが、曹操らの豪族軍に鎮圧されて消滅した。

長江上流の四川では、**張陵が五斗米道を組織した**。病気が治ると五斗（ペットボトル5本分）のコメを納めさせたので五斗米道、教祖を「天師さま」と呼ぶので「天師道」ともいう。教団国家を建てたが曹操に服属し、のちに**江南に勢力を拡大**した。正一教ともいう。

太平道と五斗米道は、**はじめて教団を組織した**ので**道教の源流**といわれる。

華北では五胡の侵入があり、仏教が勢力を拡大していた。北魏の華北統一後、道士の**寇謙之**は華北の道教を再建して**新天師道**を開き、3代太武帝に訴えた。

「西域伝来の怪しげな仏教が広まったため、民衆は出家し、家業を捨てて税を納めません。我が国古来の道教は迫害されております」

太武帝は道教を国教化し、**廃仏を命じた**。廃仏とは仏教禁止令のこと。寺は焼かれ、僧侶はとらわれ、元の身分に戻された。

太武帝の暗殺により、廃仏は中止された。すでに仏教は宮廷にも広まっていた。仏教教団も、弾圧を避けるために政権に保護を求めた。

▲ 雲崗石窟

▲ 竜門石窟

「仏教は怪しいものではありません。われらは陛下のご長寿と、お国の安泰を仏に祈っております」

都・**平城の近郊、雲崗石窟**では、崖を削って5体の**大仏**が刻まれた。これは、北魏の5人の皇帝を仏陀の姿で表したものだ。孝文帝の洛陽遷都後は、**洛陽近郊の竜門石窟**に大仏が刻まれた。雲崗はガンダーラ様式だが、竜門は中国様式になっていく。

仏教と政治権力

道教教団は政府に働きかけ、北魏太武帝から唐末五代まで、4度の廃仏を行わせた（仏教側は「三武一宗の法難」と呼ぶ）が、長続きしなかった。仏教はすでに中国に深く浸透していたからだ。仏教も道教も多神教なので、共存はできる。

仏教側は廃仏を避けるため、**国家を守る仏教（鎮護国家）という思想**を唱えた。唐代には道教が第一とされたが、仏教も盛んだった。則天武后は熱心な仏教徒で、全国に国立寺院を建て、鎮護国家を祈願させた。これをまねしたのが日本の聖武天皇で、**奈良・東大寺に大仏を、全国に国分寺・国分尼寺を建立**させ、日本国の安泰を祈願させた。

4 隋唐帝国

①隋の統一

隋(楊氏)も唐(李氏)も、祖先は鮮卑族だ。漢化して、楊とか李とか漢人風の姓を名乗るようになった。**楊堅**は、華北を統一した北周(宇文氏、これも鮮卑族)の外戚として実権を握り、宇文一族を殺して皇帝となり、**隋**を建てた。南朝・**陳を滅ぼして南北朝を統一(589)**。北魏→西魏→北周と受け継がれた均田制、均田農民を徴兵する西魏以来の**府兵制**、均田農民に課税する**租庸調制**、刑法と行政法をあわせた法典である**律令**を整備した。

科挙を始めたのも楊堅だ。官吏登用法についてまとめよう。

中国の官吏登用法	
漢の**郷挙里選**	**地方長官**が有徳者を推薦。豪族に有利。
魏の**九品中正**	**中正官**が有徳者を推薦。**門閥貴族**の形成。 「上品に寒門なく、下品に勢族なし」
隋の**科挙**	学科試験。政策・儒学経典・詩の3科目から選択。 身分に関わらず能力で採用する。

郷挙里選で豪族が有利だったことは話したよね。魏の九品中正は、専門の面接官である中正官を地方に派遣して、合格者を9段階に評定した。一番上が一品、一番下が九品だ。これにより将来の出世も決まる。ところが郷挙里選と同じく、豪族の子弟ばかりが優遇され、上位の評定を受けて高級官職を独占した。**高級官職を独占した豪族のことを、門閥貴族という。**

◎どうして、郷挙里選と同じ結果になったんですか？

採用の基準があいまいだからだ。郷挙里選も九品中正も、客観的なテストで能力を測るのではなく、「徳がある」という地元の評判を聞いて採用する。中央政府から地方へ派遣される地方長官も中正官も、現地のことは何も知らない。そこで、現地の有力者＝豪族に相談する。

「この地方の有徳者はだれか？」

豪族は答える。

「うちの息子でございます」

郷挙里選には、地方豪族を中央政府がうまく取り込んでいく、というプラスの面もあったが、能力もないのに家柄だけで官僚が選ばれるというマイナスもあった。これを皮肉ったのが、「上品(高級官職)に寒門(庶民)なく、下品(下級官職)に勢族(豪族)なし」、ということわざだ。

◎隋はどうして科挙を始めたんですか？

楊堅は鮮卑族の出身だった。実力だけでのし上がり、皇帝になった。自分のように能力のある人間を官僚にして皇帝権力を強め、門閥貴族を押さえこもうと考えたわけだ。

科挙は完全なペーパーテストで、政策・儒学の経典・詩の3科目から1つ選択する。受験生は、受かりやすい詩のコース(進士科)に殺到した。科挙は、清朝末期の 1905 年まで 1300 年も続いた。

楊堅のもうひとつの功績は、**大運河**の建設だ。

長江の中下流域の温暖な地域を**江南**という。東晋・南朝の貴族が北方からの避難民を労働力として水田開発を進めた。江南の気候は、日本の本州以南と同じで梅雨がある。だからコメを作れる。

一方、北朝が支配した黄河流域の華北（中原）は、北海道の寒さで、梅雨がない。コメは育たず、麦や雑穀を主食にしていた。麦を粉にして、麺類や饅頭、餃子を作る。今でも北中国ではこれらが主食だね。

南朝を併合した楊堅は、江南のコメを華北に運んで食糧不足を解決しようとした。江南と黄河を結び（**通済渠**）、黄河と都の大興城を結び、黄河と長城を結ぶ（**永済渠**）運河網が建設された。これらをまとめて大運河という。工事は2代**煬帝**に引き継がれ、ようやく完成した。大運河は南北統一に必要なものだったが、300 万の人民が工事に動員され、恨みを買うことになった。

煬帝（楊広）は長男ではないが、父・楊堅が病に倒れると見舞いに行き、父の遺言と称して兄を処刑し、2代皇帝となった。始皇帝が死んだときとそっくりだ。楊堅を殺したのも煬帝だといううわさが流れた。父殺しは儒学では滞在だ。事実なら天が許さず、革命が起こる。

煬帝は名誉挽回のため、**高句麗遠征**を命じた。

「北方の蛮族・高句麗を討ち、楽浪郡を奪回せよ」

運河労働者が徴兵され、北方に送られた。遠征軍は戦意がなく、3度高句麗と戦って大敗した。軍の一部が反乱を起こしたため、煬帝は都を脱し、大運河経由で江南へ逃げる途中で親衛隊にも裏切られた。

「父殺し、兄殺し、天に逆らい民を虐げる暴君、覚悟しろ！」

煬帝の暗殺により隋は2代で滅亡した。

②唐の成立

長城防衛軍の司令官だった**李淵**・李世民の父子は、煬帝暗殺の報を聞いて都に入城し、**唐(618-907)**を建てた。高齢の李淵はすぐに退位し、2代**李世民**が跡を継いだ。最初にやったことは、運河建設の中止、高句麗遠征の中止だ。「人民は家に帰り、休め」

李世民の時代（年号が開元）は、理想の時代として「**貞観の治**」と呼ばれ、李世民は最高の名君と称賛された。隋がひどすぎたからね。

皇帝の名前

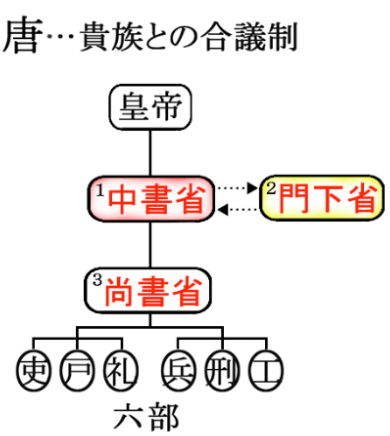
目上の人を直接呼ぶのは失礼。学校の先生や会社の上司に対して「先生」、「課長」と呼び、本名で呼びかけることはない。皇帝ともなれば、本名を呼ぶことは許されない。「皇帝陛下」と呼ぶ。亡くなった後は、その皇帝の業績を表わす「**おくりな（諡号）**」や、「**廟号（○祖・○宗）**」をつける。

建国者は太祖か高祖。事実上の建国者は太宗。遷都すれば世祖、武勇に優れていれば武帝、文化を保護すれば文帝、幼少で亡くなれば小帝…。

高祖や武帝は何人もいる。正確には「漢の高祖」、「漢の武帝」と書くべき。「煬帝」は、「天に逆らう暴君」を意味する。明朝以後は、年号＝おくり名となった（**一世一元の制**）。たとえば、「洪武帝」＝洪武年間の皇帝、となる。

③唐の官僚制度

独裁化して短命に終わった隋の失敗に学び、唐は集団指導体制を採用した。中央政府は、中書・門下・尚書の三省と六部からなる。



中書省は、**科挙官僚の秀才を集めて詔勅（皇帝命令）を起草する**官庁だ。ここでは、皇帝の意志が直接、反映される。

門下省は、**門閥貴族の拠点**となった官庁。中書省から送られてきた**詔勅案に修正を加えたり、拒否したりできる**（封駁）。ここで門閥貴族の意見も取り入れるわけだ。

尚書省は、**詔勅の執行機関**。尚書省の内部が**吏部・戸部・礼部**と、**刑部・兵部・工部**の6つの部署（六部）に分かれている。何をする官庁か、名前を見ればだいたいわかるよね。

不思議なのは礼部だ。「礼」は、儀礼や文化全般を扱う。外交儀礼、たとえば日本からの遣唐使は礼部が応接する。科挙を実施するのも礼部の仕事になる。だから外務省兼文部科学省だ。

○吏部って何をするんですか。

名前の通り、**官吏（文官）の採用と人事**を行う。ということは、科挙で採用が決まるのではない、ということだ。科挙合格者は官吏候補生の資格を得るだけで、実際の採用試験は吏部が行う。この吏部試は学科試験ではなく、採用面接だ。試験官は、受験生の外見、言葉遣い、文字や文章の美しさをチェックする。身なりや言葉遣いが美しい受験生は、高貴な家柄の者が多い。よって貴族に有利になる。

さらに、**高級官僚の子弟は自動的に父親の官位を授与され**（蔭位の制）、科挙は骨抜きにされた。門下省が貴族の拠点になってしまったのは、こういうわけだ。どこまでも貴族に甘い唐王朝だったが、それによって強大な力を持つ貴族勢力を抱き込み、長期政権を実現したわけだ。

④唐代の東アジア

高句麗は、ツングース系の狩猟民族だ。のちに満州と呼ばれる東北の森の中で狩りをして暮らしていたが、騎馬戦法を取り入れて強大化した。五胡が華北に侵入したどさくさに、高句麗は**楽浪郡を滅ぼした**。全盛期の王である**広開土王**は朝鮮半島を南下したため、圧迫された半島南部では国家統一が進み、いまの韓国の西側を**百済**、東側を**新羅**が統一した。両国は半島南端の鉄の産地、加羅諸国を争った。

隋の煬帝の高句麗遠征がぶざまな失敗に終わったあと、唐は高句麗の背後にある新羅と手を組み、高句麗を挟撃しようと考えた。とはいえ、唐と新羅とでは国力が違いすぎるので、**冊封関係**を結んだ。

◎冊封関係って何ですか？

中華皇帝が周辺諸国の首長（王）を臣下にすることだ。後漢の光武帝が倭の奴国王に金印を授けた話、覚えてるよね。あのとき奴国王は光武帝の臣下になったんだ。周辺諸国の王、たとえば新羅王が唐の皇帝に使者と貢ぎ物を贈る（**朝貢する**）。すると唐の皇帝は、新羅王に対してお返しの品を贈り、王号や官位、年号を与える（**冊封する**）。必要なら軍事援助もする。中華帝国の軍事力は圧倒的だから、どんな小さな国でも中華帝国から冊封されれば周りの国はびびる。

「新羅王よ、ともに高句麗を攻めようではないか」

「皇帝陛下、我が国は百済からも脅かされています。先に百済を…」

てな感じで、唐と新羅の連合軍が百済を滅ぼしてしまった。人質として倭国に滞在中だった百済王子は倭国に援軍を求めた。中大兄皇子は**百済救援の倭国軍を派遣したが、白村江の戦い（663）で大敗**した。唐・新羅連合軍は次に北上して高句麗を滅ぼした。唐は、朝鮮半島全体を併合するつもりだったが、高句麗人や百済人の抵抗運動が続いた上に新羅がこれらを支援したため失敗した。結局、旧百済領と**平壌以南の高句麗領**を新羅領とし、その北は唐に併合した。この結果、**新羅が朝鮮半島を統一**し、倭国が日本になった。

◎えっ、「日本になった」って、どういう意味ですか？

それまでこの列島にあった国は、倭国だった。**倭国王は歴代中華帝国に朝貢し、臣下の立場だった。**だから「王」なんだよね。卑弥呼は魏の皇帝から「親魏倭王」として冊封され、倭の五王は東晋・南朝の皇帝たちから「安東大将軍倭王」として冊封された。倭国皇帝とは絶対にいわない。だから煬帝のとき、倭国の遣隋使として派遣された小野妹子がもってきた国書が大問題になった。

「日いずるところの天子、日没するところの天子に書をいたす」

太陽が昇る（東の）国の皇帝が、太陽が沈む（西の）国の皇帝に手紙を送る、という意味だ。天子というのは皇帝のこと。煬帝はいった。

「蛮夷の書、無礼なるもの」（野蛮人の手紙、無礼である）

この時代から、**倭国が中華帝国の臣下の地位から脱しようとする意志**がはっきりしてくる。さらに白村江の戦いで、倭国は唐に反逆した。唐に攻め込まれる危険もあった（唐は高句麗遠征に忙しく、倭国遠征はできなかった）。このあと 30 年ほど遣唐使は中止され、**702 年に再開された遣唐使が、「日本国」の使者と称した。**これが、世界史に登場する「日本国」の第 1 号だ。「日本」とは太陽が昇る国という意味。天皇と称号も使い始めた。倭国は中華帝国の冊封国だったが、日本国は完全な独立国だ。白村江の戦いの時はまだ倭国だったので、日本と書いてはいけない。カエサルのガリア遠征をフランス遠征とはいわない。フランスはまだなかった。それと同じことだね。

倭王はいつから「天皇」になったのか？

「王」も「皇帝」は中国語だ。日本語では「おおきみ」とか「みかど」というのが君主の称号だった。おおきみが中華帝国から冊封されると「倭王」の称号をもらう。冊封されたくないときは、「天子」、「天皇」と自称する。天皇の称号は7世紀後半、天武天皇の時代には国内で使われていた。しかし中華帝国は倭王を皇帝とは認めず、国書の宛て名書きは「日本国王」となる。天皇はこれを受け取らない。その後、足利義満が日本国王を名乗って冊封されたことはあるが、天皇は 1300 年の間、中国からの冊封は受けかった。明治維新後、明治天皇は清朝皇帝に対等外交を求め、清朝と朝鮮と日本の「君臣関係」が再び外交問題になる。

◎唐は文句言わなかったの？

ちょうど旧高句麗人の独立運動（渤海の建国）に悩まされていて、日本とトラブっている暇がなかった。いくら唐が強いといっても、世界の果てまで征服することはできない。日本のような海の向こうの遠くの国は、「蛮族だから仕方がない」ということにして放っておく。イスラーム帝国やインドに対しても同じ扱いだ。世界の真ん中に唐の直轄領があり、隣接して**羈縻州**があり、**冊封国（藩属国）**があり、その外側に蛮族がいる、という世界観だ。

◎羈縻州って何ですか？

羈縻っていうのは、馬や牛の鼻につけるロープのことだ。羈縻をつけるとは、飼い馴らすという意味。高句麗を滅ぼしたあと、**安東都護府をおいて唐軍が駐留**したが、その下の**羈縻州の長官には高句麗人を任命して自治を許す**。形の上では唐の領土になったが、実際には以前の生活と変わらないという、ゆる～い支配を行ったんだ。その証拠に、**都護府は全部で6つ**しかなかった。広大な羈縻州を直接統治するには、都護府を何百か所も置かなければならなかったはずだ。

モンゴル高原では、柔然に変わって**突厥**が台頭した。テュルクというのが本来の民族名だ。当て字で「突厥」と表記する。日本語では、「トルコ」という。**はじめて文字をつくった北方遊牧民族**で、文字の解読からトルコ人だとわかったんだ。これ以前の遊牧民――匈奴・鮮卑・柔然は文字をもたなかったので、どういう言葉を話していたのか、永久にわからない。

建国者イリ可汗の弟は、**エフタルを滅ぼして西突厥を建て、ソグド地方を支配**した。隋・唐は、東西突厥を仲違いさせる離間政策をすすめた。唐の李世民は東突厥に、高宗は西突厥に勝利し、いずれも羈縻州とした。

◎今のトルコと関係ありますか？

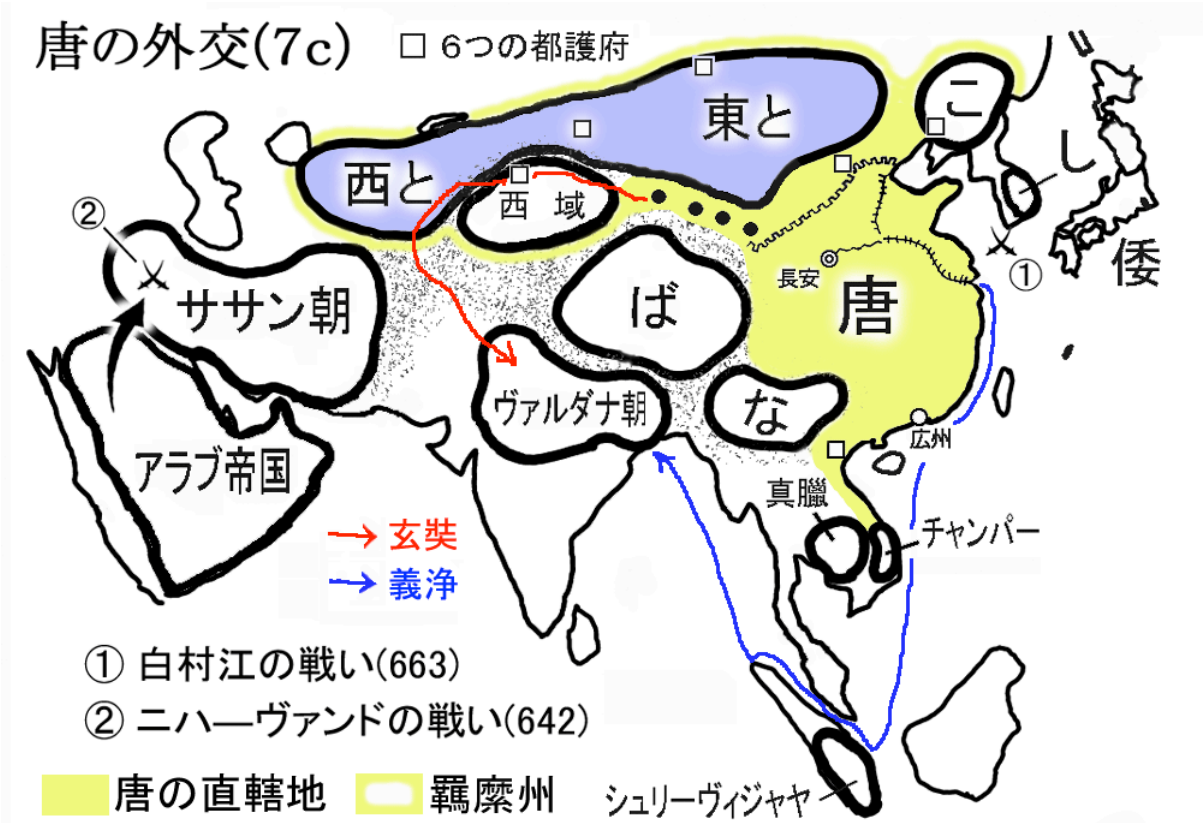
今のトルコ人の祖先だ。今のトルコ共和国はギリシアの隣の小アジアにあるけど、トルコ人の祖先は突厥時代にモンゴル高原にいたんだ。何度も移動を繰り返してセルジューク朝の時に小アジアにたどりついた。今でも、イスタンブルのトルコ人は中央アジア諸国へ行くと言葉が通じる。ウイグル語も、ウズベク語も、キルギス語もトルコ語の方言だ。

次は、チベット高原だ。チベット系民族は何度も出てきたよね。

◎氐とか、羌とか…

犬戎もそうだったね。チベットは平均高度が富士山頂よりも高い 4000 メートルという過酷な環境だが、インドと中国を結ぶ中継貿易が行われてきた。ここを最初に統一したのは、**ソンツェン=ガ**

ンポの吐蕃王国だ。インドから文字を学んでチベット文字を定め、ネパール王女を妃に迎えて、仏教を受け入れた。のち、**仏教（密教）と土着信仰が融合して**チベット仏教**が生まれた**。唐の李世民は、娘の**文成公主**をチベットに送り、ソンツェンの外戚となって友好関係を結んだ。チベット高原を征服するのは無理なので、結婚によって手なづけたわけだ。後漢の時、後宮の王昭君を匈奴に送った話は、漢文でやるよね。政略結婚は事実上の人質だったから、娘を差し出させた吐蕃のほうが唐より優位に立っていた証拠だ。



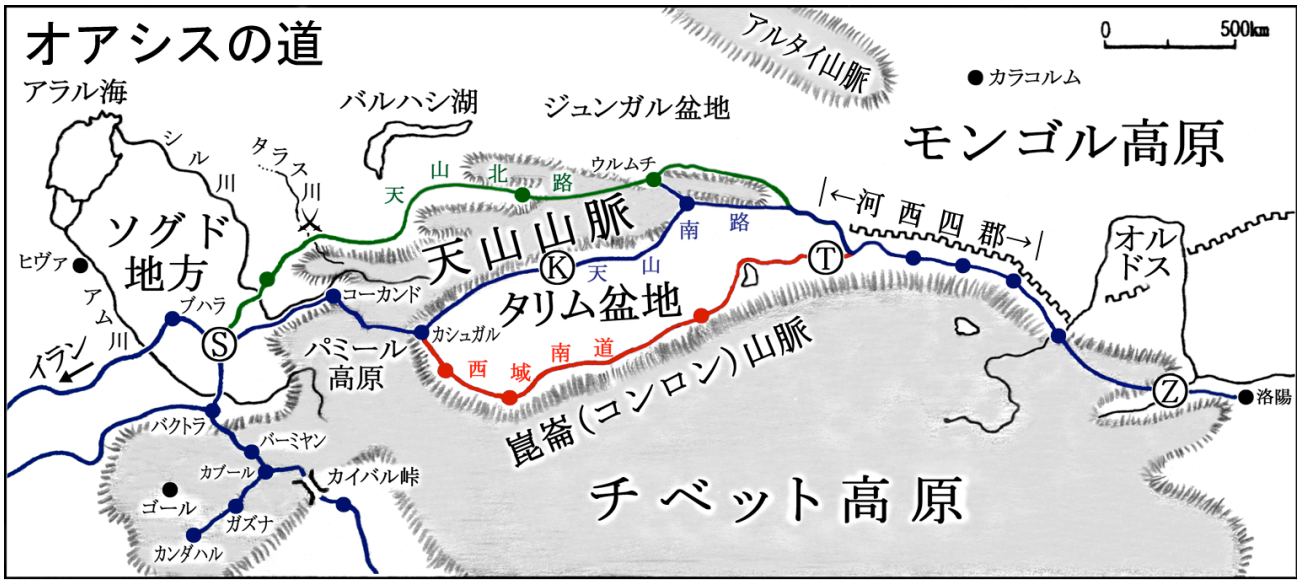
と 突厥 …トルコ系遊牧民。柔然から独立。
ば 吐蕃 …ソンツェン=ガンポがチベット高原を統一。
な 南詔 …雲南高原を統一。
こ 高句麗 …ツングース系狩猟民。楽浪郡を攻略。
し 新羅 …朝鮮半島を統一。

と 突厥　ば 吐蕃　な 南詔　こ 高句麗　し 新羅

次は**雲南高原**。チベット高原がインドシナ半島のほうに出っ張っている部分だ。チベットを源流とする大河――長江、メコン川、イラワディ川はいずれも雲南高原を通るので、ここを押さえると**中国・東南アジア間の中継貿易**をコントロールできる。雲南を最初に統一した**南詔**は、**チベット=ビルマ系**の国。吐蕃に対抗して唐から冊封された。

唐は、中心から周縁に向かって直轄領→羈縻州（突厥・高句麗）→冊封国（新羅・南詔）→その他の国（吐蕃・日本）というさまざまな形で東アジアに影響力を及ぼした。文化的影響力は絶大で、漢字・仏教・律令・都市計画（条坊制）は周辺民族も取り入れている。

唐が突厥を服属させて中央アジア方面まで羈縻州にしたことにより、オアシスの道の安全が確保され、東西交易が盛んになった。長安から西へ向かうと河西四郡を過ぎると道は3本に分かれる。天山山脈の北を通る**天山北路**、天山の南、タリム盆地の北を通る**天山南路**、タリム盆地の南を通る**西域南道**の3つだ。天山南路を進むと亀茲（きじ）がある。



S サマルカンド　K 亀茲　T 敦煌　Z 長安

◎仏図澄・鳩摩羅什の出身地ですよね！

だよね。亀茲を通過して盆地の西で西域南道と合流する。ここから難所のパミール高原を超えると、サマルカンドで天山北道と合流する。このサマルカンドを中心とする地域が**ソグド地方（ソグディアナ）**で、住民はイラン系の**ソグド人**で、古くから交易に従事し、唐代にはオアシスの道の交易を独占した。子供が生まれると手にコインを握らせ、蜂蜜をなめさせた。口がうまく、カネ儲けがうまくなるようにというおまじないだ。官僚や軍人として採用される者もいた。唐を揺るがす大反乱を起こした**安禄山**（あんろくざん）も、父がソグド人だった。

オアシスの道を通じて、イランの宗教（三夷教（さんいきょう））が唐に伝わった。

景　教	ネストリウス派キリスト教。エフェソス公会議で異端とされた。長安に大秦寺を建造、「大秦景教流行中国碑」を建てる。
祆教（けんきょう）	ゾロアスター教。ササン朝の国教。
摩尼教	マニ教。ササン朝で異端とされた。

ササン朝ペルシアが**ニハーヴァンドの戦い(642)**に敗れ、イスラーム教徒に征服されたあと、多くの亡命者が長安に流れ込んだ。長安は人口の3分の 1 がイラン人で、キリスト教会やゾロアスター教寺院が並び、ペルシア語が飛び交う国際都市だった。

イスラーム教徒は**タラス河畔の戦い(651)**で唐を破り、唐の羈縻州だった天山以北の中央アジアに進出した。一方で、海の道では平和な交易が続き、広州には 10 万人のイスラーム商人（大食／タージー）が住む外国人居住区があった。唐は**広州に市舶司をおいて貿易を管理**し、外国商人から徴税をおこなった。

唐代には、2人の僧侶がインドを訪問した。**玄奘**は、李世民の時に**オアシスの道**を通ってインドへ向かった。西突厥が唐と争っていた時代なので、危険を冒しての旅だった。ヴァルダナ朝で経典を集め、ナーランダ―僧院で学んだ。帰りも陸路を戻り、**『大唐西域記』**を書いた。のち**小説『西遊記』**のモデルになった人だね。

義浄は、3代高宗の時代に広州から海の道を通ってインドを往復した。すでにヴァルダナ朝が崩壊したあとで、ヒンドゥー教が盛んになっていたインドでは学ぶものがなく、途中立ち寄ったスマトラ島の仏教国、**シュリーヴィジャヤ王国**で学び、**『南海寄帰内法伝』**を書いた。2人のたどったルートは、地図問題で出題される。

⑤唐の動揺――武韋の禍

高句麗・西突厥を併合して最大領土を築いた3代高宗は、病弱だった。ベッドで過ごすことが多い皇帝に代わり、皇后の**則天武后**が政治に関与した。彼女は中書省の官僚を味方につけ、貴族勢力の弾圧と皇帝権力の強化を図った。夫の死後、息子の中宗を追放し、国号を「周」と改めて自ら皇帝になった。中国史上、唯一の女帝だ。

当然、貴族たちは猛反発し、武后の死によって計画は挫折した。ところが今度は、都に戻った中宗の皇后である**韋后**が政権を奪おうとし、夫の中宗を毒殺する。中宗の甥の**玄宗**は、韋后を殺して唐王朝を守った。外戚・武氏と韋氏による唐王朝乗っ取り事件を**武韋の禍**という。「禍」とは「わざわい」という意味だ。

漢王朝が王莽による乗っ取り事件をはさんで前漢・後漢に分かれるように、唐王朝も武韋の禍をはさんで前後に分けて考えよう。前半の全盛期が**李世民の貞観の治**、後半の全盛期が**玄宗の開元の治**だ。開元の治は、詩人の李白や杜甫が活躍した華やかな時代だが、実は見えないところで唐の崩壊が始まっていた。

⑥均田制の崩壊と唐の衰退

領土が拡大すれば、軍事費がかさむ。人民の税負担と兵役が重くなる。ローマ帝国と同じだ。唐の税制と兵制を見てみよう。

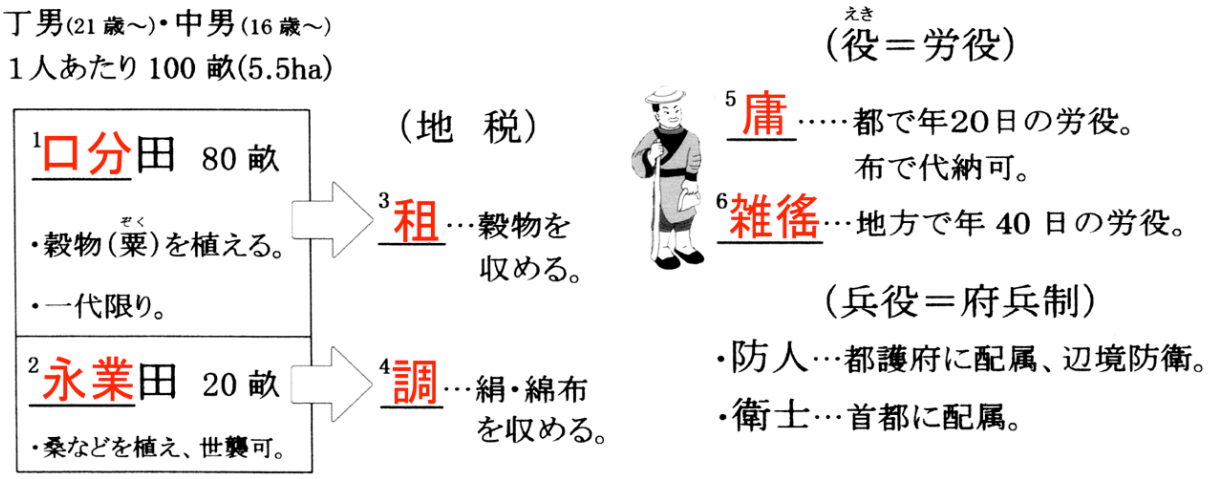
唐の均田制は丁男（成人男子）と中男（16 歳以上の男子）に 100畝の土地を支給する。5.5 ヘクタール、230 メートル四方の広い土地だ。これを家族で耕作する。口分田80 畝と永業田 20 畝に分かれる。

口分田には穀物を植える。毎年刈り取って、穀物税（**租**）を納める。持ち主が死んだら、国に返す。永業田では桑や麻を植える。カイコを飼い、絹織物を織る。あるいは麻を織る。布を納める税を

調という。桑畑は毎年さら地にするわけにいかないから、持ち主が死んだら息子に受け継がせる。以上が、土地にかかる税金だ。租（穀物）と調（布）は、都まで運ばなければならない。

都では、年に20日間の労役がある。道路や宮殿の工事、公共事業に使われる。これを庸という。強制労働なので給料は出ない。地元では年に40日の労役がある。**雑徭**という。庸と合わせて1年のうち2カ月間はタダ働きということだ。このほかに兵役がある。都を守る衛士や、羈縻州を守る防人として徴兵される。これらはすべて、均田を支給された農民男子の義務となる。それでも均田が欲しい？

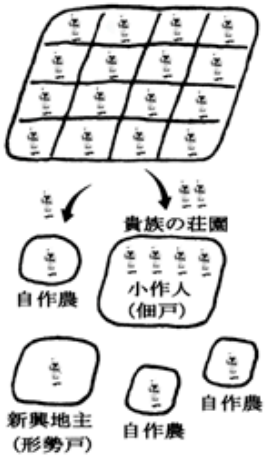
唐の均田制



◎だったらいらない…

だよね。だから均田を捨てて逃げちゃう農民が出てくる。同じ働くのなら、貴族の荘園で**小作人**（**佃戸**）をやったほうがいい。兵役や都で強制労働はなくなるからね。やる気のある農民は、自分で荒れ地を開墾して**自作農**になるという手もある。自作農のなかには、土地を広げて**新興地主**（**形勢戸**）になる者もいた。

均田制の崩壊

（土地制度）	（税　制）	（兵　制）
国有地（均田）  私有地の拡大	1 租庸調 制…隋～唐。 ・均田農民に課税。 ・年1回、定額。 ・2 現物 納（粟2石、絹2丈）。	7 府兵 制…8 西魏 ～唐。 ・均田農民を徴兵。 ・各地の9 折衝府 で訓練。 ・辺境の10 都護府 に配属。
3 両税 法…唐代後半(780)～明。 ・徳宗の宰相 4 楊炎 が建議。 ・現住地の 5 資産 に応じて、 ・年2回（夏6月と秋11月） ・6 銭 納を原則とする。		11 募兵 制…唐代後半～宋。 ・12 玄宗 が実施(722)。 ・軍司令官（13 節度使 ）に、 14 徴税 権（財政権）付与。 ・現地で15 傭兵 を募集。

均田は荒れ、租庸調は集まらない。唐の末期、**徳宗の宰相・楊炎**が建議した。宰相というのは、中書省の長官で官僚のトップだ。

「皇帝陛下、私有地を認める代わりに、私有地から課税しましょう」

こうして始まったのが**両税法**だ。**現住地**、つまり逃げた先**で所有している資産**を調べ、これに応じて課税する。形勢戸からはたくさん徴収するし、佃戸からは徴収しない。**夏と秋の分割納税**を認めて納めやすくし、農産物は市場で売って**銅銭を地方政府に納めればよい**とした。この合理的な税制は、唐末から宋、元、明まで続いた。

もっと深刻なのは兵士の不足だ。**均田農民を徴兵する府兵制**は**西魏**に始まり、北周、隋、唐と受け継がれた。農民は全国数百か所の**折衝府**に配属され、交代で都や都護府に派遣された。均田農民がいなくなると都護府の兵士が不足し、羈縻州の異民族は唐の支配を脱した。旧高句麗では大祚栄が渤海を建国し、モンゴル高原ではトルコ系のウイグルが独立した。ソグド地方にはイスラーム教徒の侵入が始まった。**タラス河畔の戦い（751）**でアッバース朝に敗れた唐は、中央アジアから撤退する。

6代玄宗は、10 人の**節度使**（辺境軍司令官）を任命したが、財源がないので**節度使に徴税権**を与え、兵士もいないので**現地で傭兵を募集**させることにした。このシステムを**募兵制**という。辺境に住んでいるのは異民族が多いから、傭兵隊はソグド人やウイグル人、高句麗人などの混成部隊となる。これを指揮する節度使にも、異民族出身の武将が多い。ここで、ソグド人武将の安禄山が節度使として登場する。